第三話

# ベタニヤのマルタ

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る」

（ヨハネ一一・四〇）

## ♣ラザロの急変

「しっかりしなくては。あわててはいけないわ。こんな時こそ落ち着くのよ。マリヤ、そんなに泣かないで。ラザロは治るわ、きっと、すぐに」

マルタは妹のマリヤに言い聞かせながら、その半分以上は自分に言い聞かせていました。マルタだってくじけそうなのです。

「そうならいいけど。でも、心配でたまらない。こんなに荒い息をして。いままで一度もなかったことでしょう」

マリヤは姉の進言を受け入れかねて小さく反論します。不安のやり場がないのです。涙があふれてしかたがないのです。

「イエス様にはもう連絡がついたかしら。早くおいでになってほしい、一刻も早く」

マルタはせわしなくなんども入口に視線を延ばします。妹の涙を見ていてもどうにもならない、そう思うからです。

実際、二人はイエスを待ちわびていました。

すでにイエスのもとには使いの者が出向いていました。マルタの短い伝言を懐中に収めて。

イエス様。弟ラザロが急病で苦しんでいます。意識も定かではありません。不安が募ります。どうか早くおいでください。

きっとすぐに飛ぶようにして来てくださる。イエス様のことだもの。お優しいイエス様、愛に満ちたイエス様だもの。ラザロは特別に愛されているし、わたしもマリヤも特別に親しくさせていただいているんだから。

イエス様、早くおいでになって、私たちを助けてください。

イエスの到来にだけ一筋の希望を繋ぐマルタの耳底にはすでにイエスの軽快な足音が聞こえていました。なつかしい笑顔も目の前に浮かび上がってきます。同行する弟子たちの少々荒っぽい話し声まで聞こえてくるのです。マルタもマリヤも、この危急を救えるのはイエス以外にいないと信じ切っていました。

マルタとマリヤ、ラザロの三姉弟は都エルサレムから東に三キロほど行ったオリーブ山のふもと、エリコ街道に沿うベタニヤ村に暮らしていました。イエスは都へ上る道すがらに、必ず彼らの家に滞在するようになっていました。イエスの教えと人格にひどく傾倒したラザロが、ぜひ自分の家を使ってほしいと申し出たからです。ラザロはイエスを招くことがうれしくてなりませんでした。意気に燃え信仰に燃えて、イエスのために神のために、なんでもしたいと熱

していましたから。イエスが喜んで宿泊するのを見るたびにラザロの喜びもいっそう増幅するのです。少しでもイエスの役に立っていると思うと快く胸が膨らむのでした。イエスは年若いラザロにそれ以上の働きを要求しはしませんでした。宿を提供してくれるだけで十分だよと、言っているようでした。ただ、イエスが好青年ラザロを非常に愛し、特別に目をかけておられることはだれの目にも明らかでした。

## ♣イエスへの敬慕

マルタとマリヤがイエスを崇敬しているのはラザロの影響だけではありません。

こんな出来事がありました。

同じ村にシモンという男性がおりましたが、彼は不治の病として恐れられていた重い皮膚病を患っていました。この病に取りつかれた者は神から呪われているとして容赦なく差別のレッテルを貼りつけられ、重病患者は隔離、家族からも見放されることがしばしばでした。ユダヤにはそうした非情な習慣が大きな顔をしてまかり通っていました。イエスはそんな悪習を知ってか知らずか（いや十分に承知していたはずです）彼を抱き寄せて患部にしっかりと手を置き、天の神に向かって心底から祈ったのです。

後にシモンが村中にふれて回ったことですが、シモンの話によればあれほどの病が跡形もなく消え去ったと言うことです。村人が驚いたのはそれだけではありません。シモンの精神がすっかり変わったことです。心が変わり容貌までが変わったのです。以前のシモンとは別人でした。新しい人シモンになっていました。シモンの親類や隣り近所の者たちの驚きはあまりあるものでした。

マルタもマリヤも激しい衝撃を受けました。それは彼女たちのいのちの奥深いところ、魂の中心を揺すぶる感動でした。神のみ業とはこういうものかと、初めて恐れおののく経験をしました。彼女たちにはイエスが並の教師ではなく、かつてユダヤの歴史に現れた偉大な預言者のように思えました。エリヤやエリシャのようだとひそかに思ったのです。

ラザロのたっての勧めで、イエスが十二人の男性弟子や数人の女性弟子と宿泊するようになりました。マルタもマリヤも偉大なお方を間近に迎えることが晴れがましく、うれしく、はち切れそうな興奮に酔いながら、一行を歓迎、歓待するようになりました。

そのイエスが、この一大事に彼女たちの期待に反していっこうに現れそうにないのです。

「マリヤ、イエス様は遅いわね。あなたもそう思うでしょう。お身の上に変わったことでも起こったのかしら」

マルタはたまりかねてそう言いました。

「わたしも同じこと考えていた。でなかったら、とうにお着きになっておられるはずですもの」

マリヤだってそう言わずにはいられませんでした。

## ♣出発しないイエス

イエスはベタニヤからの知らせを聞いてもなお二日間、腰を上げようとはしませんでした。故意にそうしているとしか思えませんでした。時の経過を正確に計算しているようでした。この時のイエスの身辺には死の危険が迫っていました。イエスはとうとうユダヤの宗教界から危険人物の烙印を押され、石打ちにしてしまおうとさえささやかれていたのです。弟子たちは緊迫感に身を固くしていました。イエスを、エルサレム方面に行かせてはならないのでした。そんな事情で一行はヨルダン川を渡った、かつて洗礼者ヨハネが活動していた近辺に身をひそめるようにして滞在していました。イエスが身を隠すには大きな理由があるのです。自分の命を惜しんで避難しているのではないことは弟子たちの間では自明のことでした。イエスはことあるたびに「わたしの時はまだ来ていない」と言い続けてきましたから。しかしイエスの言う「わたしの時」が何を意味するのか弟子たちはだれ一人として理解していませんでしたが。

この最中に、ラザロ急病の知らせが届いたのです。ベタニヤに行くことはむざむざと敵の手の中に飛び込んでいくようなものでしたから弟子たちはイエスの沈黙をひそかに喜んでいました。

最悪の状況が収まるまでしばらくここにいてほしい。皆がそう願っていた時でした。イエスはきっぱりと言いました。

「さあ、もういいでしょう。ユダヤに行きましょう。ラザロの様子を見に行きましょう」

弟子たちは困惑しながら

「ユダヤ人たちが今、先生を石打ちにしようとしているのに、あえてそこへまた行こうとなさるのですか」とたしなめます。

イエスは悠然と笑みをたたえながら

「わたしはまだ死ぬようなことはありませんよ。わたしは天の父のご計画の通りに働いていますから」と、言い聞かせます。

その上で言うのです。

「ラザロは眠っているだけなのです。ですから彼を眠りから覚ましに行くのです」

弟子たちには不可解でなりません。弟子たちはラザロが重体だと察しています。急使が来たくらいですから。昏睡状態が続いているのだと想像できます。

「先生、本当にラザロはただ眠っているだけなら、きっと助かりますよね」
「マルタもマリヤも心配し過ぎて取り乱しているのでしょう。むりもないことですが」
彼らはイエスを行かせたくないのです。
急にイエスは語調を改め、重々しく断言しました。
「ラザロは死んだのです」
「えっ、死んだ?」
弟子たちは師の言葉の真意を量りかねて、互いに顔を見合わせました。質問のしようがないのです。しかし師が死んだと断言している以上、事実として肯定せざるを得ません。

## ♣もうひとつの理由

ラザロが死んだ、ラザロが死んだ。
今、師にも、もしかしたら自分たちにも、死の影が忍び寄っているこの時に、よりによって災いの前ぶれのように、あのラザロが、先生がことのほか愛した、精気に満ち満ちていた、いちばん元気だった、いちばん好感の持てた、あの美青年ラザロが死ぬなんて、何ということだ。
一同の上にはやりきれない暗さが魔物のように覆いかぶさってくるのでした。

トマスが興奮気味に叫びました。

「ラザロは死んだのか。ユダヤ人たちは先生をねらっている。石打ちにしようと企んでいる。死が我々を飲みつくそうとねらっている。だが、死がなんだ、恐れるほどのことはない。まして先生とごいっしょなら、死んでもいい。行こう。ラザロのもとへ。先生といっしょに死のうではないか」

トマスのことばはけっして独りよがりの独走ではありません。一同を代弁しているのです。

「おお、そうだ。行こう。ラザロのところへ。エルサレム恐れるに足らずだ」

「行くともさ」

イエスは弟子たちの心から恐れの異物が砕け散ったのをじっと見ていました。この時を待っていたのかもしれません。イエスは決して彼らに無理強いをしたことがありません。彼らが考え、咀嚼し、消化するのをじっと待っておられるのです。

もうひとつ、イエスがこの時まで腰を上げずにいた理由がありました。イエスはラザロが死んだのも、墓に葬られたのも、マルタとマリヤが絶望の谷に突き落とされているのも、一向に現れない自分に対して気をもんでいるのも、わかっていたのです。

イエスは死との決戦の時を待っていたのです。自分の上に迫っている死、弟子たちをも巻き

込むかも知れない死、いち早く愛するラザロを食い尽くした死、勝利の凱歌を上げている死の力、悪の勢力、罪の正体を見据えていたのです。こうしたイエスの胸中はだれにもわかりません。弟子にも、もちろんマルタ、マリヤにもです。それは隠された真理でした。しかし隠されていたのはいっときで、しばらくの後、ラザロの墓の前で、彼らは偉大な神の栄光を目撃することになるのです。そのとき、なぜイエスがラザロの死を見過ごしにしたのかその謎を知ることになるのです。

神の栄光はその渦中を命がけでくぐった者にしか見えません。イエスのいいつけどおりにかめに水をくんだカナの婚宴のしもべたちだけが、水がぶどう酒に変わるあの栄光を信じたように、です。

イエスは死と闘う状況が整ったのを確認すると、ためらいもなくベタニヤに向けて出発しました。

### ♣マルタの対応

死後四日目。

イエスと一行がベタニヤに到着した時、ラザロの葬儀はすでに終わり、遺体は墓に納められ

た後でした。一連の儀式は親族の心情にお構いなく、村の冠婚葬祭係たちの慣れた手で、ほとんど自動的にみごとなまでに手際よく進められました。

マルタもマリヤも弟の死が事実なのか、夢の続きなのか落ち着いて納得する暇もありません。もちろんラザロの臨終を見ましたし、涙が枯れるほど泣きましたし、葬儀の一つ一つにも健気に係ってきました。村はずれの墓に遺体を葬り、村人が入口を大岩でふさぐのも確かに見ました。

でも信じられないのです。うそとしか思えないのです。日に何度も墓に行き、その前に立ち、石をじっと見つめます。その時は肯定するのです。しかししばらくするとすべてがかき消えて、ふだんと変わらないラザロの笑顔がひょいと現れるように思えるのでした。

その交錯した思いの中にもうひとつの思いがいやおうなしに混じり込みます。イエスのことでした。

とうとうイエス様は間に合わなかった。

とうとうおいでにならなかった、あのお方は。どうしてなの。

マルタとマリヤはまったく同じことをくり返しくり返し考えていました。

「マリヤ、イエス様はいまだにおいでにならない。私にはどうしてもわからない。こんなことってあるかしら」

マルタは我慢ができないのです。言葉に出してしまわなければやりきれないのです。その語気が荒れています。不平と怒りがむき出しに見えています。

マリヤはそうまでは言いません。言いたくないのです。言ってしまうのが怖いのです。これ以上悲しみの谷を下るのが恐ろしいのです。

「姉さん、今にきっとわかるわ。だから言わないで…」

「そうね、その通りよ、きっと。マリヤの方がよほどイエス様を信頼しているのよ。いまさら騒ぎ立ててもどうにもならないことだもの。ラザロは帰ってきやしないのよ。死んでしまったのだから」

マルタは激しく泣きだしました。

「そんなにあからさまに言わないで。そんなに泣かないで。姉さんに泣かれてしまったら、わたしはほんとうにどうしていいかわからない」

マリヤの目にもまた新しい涙があふれ出てくるのでした。ラザロの死以来、渇いたことのない涙でした。

外に人の気配がして、うわずった声が響きます。

「イエス様がようやくお着きですよ。こちらにお迎えしますか、それとも墓地の方に…」

一塊の風のように飛び出したのはもちろんマルタ。声に体をぶつけるように駆け出していました。

イエス様がこられた、イエス様がおいでになった、イエス様が来て下さった。ラザロが死んでしまったことをお伝えしなければ。もう四日も経っていることをお話ししなければ。どんなに辛かったか聞いていただきたいものだわ、この涙だって見ていただきたい。

イエスは数人の弟子たちと足早に村に入って来たところでした。

ああ、イエス様。お待ちしていました、どんなにか。

マルタは胸が砕け散るような気がしました。

「主よ。遅かったのです。ラザロは、ラザロはもう…。あなたがここにいて下さっていたら死ぬことはなかったでしょう。死なずにすんだはずです。遅過ぎました」

なじるつもりはありませんでした。愚痴を言うつもりもありませんでした。イエスなら辛さも苦しさも、なによりもこの悔しさをわかってもらえる、それを言って見たい、そう思っていただけなのにイエスに会ったとたん、張りつめていたものがはらはらと解けていき、口を突いて出たものは恨みを含んだ不平でした。思えばこれこそが、マルタがいちばん言いたかったことでした。マルタはいつも明快な会話を好みました。特にイエスの前で何を隠せましょう。全

部聞いていただきたいのですから。イエスの寛容と穏やかさを信じていたからこそです。
イエスは、さあ、なんでも言ってごらんなさい、聞きますよと言わんばかりに、腰の辺りで両手を開いてマルタを見つめました。
ふっとことばが切れて、マルタは大きく息をつきました。
言い過ぎた…、
小さく胸の痛みを感じました。
「でも、主よ。いまでも私はあなたを信じています。あなたがお祈りすれば、天の神様はどんなことだってかなえてくださるでしょう。あなたを信じていることには変わりはありません」
言い訳ではありませんでした。これもマルタの本心でした。それに、イエスへの敬慕や信仰を疑われたくなかったし、なによりも取り乱して我を失う軽率な女に見られたくないという気張りがありました。

**♣よみがえりの予告**

乱れる思いの真ん中にイエスの一言が響きました。
「あなたの兄弟はよみがえりますよ」

はっとして、イエスの顔を見つめました。もつれた思いが整えられていきます。そうだ、来世があるのだ。

「はい、主よ、いつの日かその時に、彼がよみがえることに希望を持っていますとも」

たたみかけるように、イエスの声が続きました。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。いいですか、死んだ者でも生きるのです。また生きていてわたしを信じる者は決して死ぬことはありません。永遠のいのちを持つことができるのです。わたしが、死者をよみがえらせ、朽ちないいのちを与えるのです。あなたはそれを信じますか。わたしを信じますか」

イエスのことばの一言、一言をかみしめて理解するには今は時が足りません。理解力も足りません。しかしマルタはイエスが今、なにかとても大切な新しい真理を語っておられると直感しました。とっさに、聞き逃してはいけないと思い、できるだけ広く心を開け、意志を傾けて受け入れようと努めました。イエスのことばは杭のようにマルタの思いの中に打ち込まれていきました。やがてマルタはその土台の上に信仰の家を建てることになるのですが。

「はい、主よ。私はあなたが世に来られる神の子キリストであると信じています」

マルタは聞き終るとためらいもなく言い切りました。神の子のキリストです、と。

はじめて使ったのです。ふいと言えたのです。風が吹き落とした木の実のひとつを思わず拾い上げたような、一瞬のことでした。

神の子キリストです。

無意識とも言えるほど軽やかに飛びだした一言でした。口の中にほのかな甘さが漂ったのをよく味わいもしないで、マルタは先へ先へと思いを進めます。マルタは心も体も行動する女性なのです。

言うだけ言ってしまうと、たまり水が流れたように心の整理がつきました。イエスに対して抱いていた先日来のこだわりが消えていました。

「そうそう、イエス様。マリヤに早く会ってやってください。まるで病人です。泣きくらしております。家に引きこもったままお墓にもめったに行かない始末です。これではほんとに病人になってしまいます。なにかお話してやってください」

くるりと背を向けると、もう歩き出していました。

「先に知らせますから、ひとまず失礼いたします」

マルタの行動力には風も追いつけないでしょう。

## ♣もてなし事件

「マリヤ、イエス様よ。あなたに会いたがっておられるわ。行ってらっしゃい」

その声を待ちわびていたようにマリヤはすばやく立ち上がりました。心はすでに走り出していたのです。マリヤだってイエス様に会いたいのです。マルタと同じです。いや、マリヤの方が強いと言い切った方が正しいのです。それはマリヤの性格から来るのかもしれませんし、マリヤとマルタのイエス理解の違いを映しているのかもしれません。

以前、こんなことがありました。

イエスが例によって彼らの家に宿泊していた時でした。その時は十二弟子を初め、他にも数人が加わっていました。もちろんラザロは元気でしたし、イエスの活動の一つ一つに目を輝かせて興奮し、見たこと、聞いたことを姉たちにうれしそうにいささか得意げに聞かせていた、そんな時期でした。

マルタは張り切って一同をもてなし、かいがいしく立ち働いていました。マルタにとって何がいちばんうれしいかと言えば、幾種もの手のこんだ料理を食卓に並べた時であり、満足げな客たちの顔を見る時であり、賛辞の声を聞く時でした。

マルタは村いちばんの働き者でした。定評がありました。村人の集まり事、婚礼の祝宴、長寿の祝いの会、出産の慶び会などの時にはよく手伝いに借り出されていました。てきぱきと仕事ができ、気働きもできたので、いつもリーダー格で取りしきっていました。とりわけその時イエスをもてなすことに夢中になっていました。

マルタは思うのです。

イエス様がまともに食事を取るのは私の家くらいにちがいない。村から村へ町から町へと旅を続け、あれほどのお働きをなさっておられるのだもの、ゆっくりお休みになることなどないだろう。せめて私の家にいらした時くらいは十分に召し上がっていただきたいし、こざっぱりした衣服も差し上げたいし、快くお休みになっていただきたいものだ。それを支度するのが私の仕事じゃないかしら。私はそう思うわ。それに私にできることはそれ以外にないわ。

しかし、その時、いっときに仕事が重なりました。二か所のかまどが同時に沸騰し始めました。野菜がまだ水につかったままでしたし、びんの中のオイルが切れてしまいました。食器もあと二、三種類そろえなければなりません。食卓の上にお花も、です。

手が必要でした。

マリヤ、マリヤはどこ、何をしているのかしら、台所へ来てもよさそうなものだわ。私のそ

ばにいるべきよ。そうよ。あの子はイエス様が来られるといつだっておそばから離れないんだから。

困るのよ、それでは。

気がせいてきた分、気が荒れてきました。

「マリヤ、ちょっと来て。早く」

奥に向かって呼びかけてみました。

すぐ、そこらあたりにいるはずなのに何の声もしません。

まあ、どうしてなの。

走り出していました。お皿を抱えたまま。

思った通りでした。イエスが語りかけており、マリヤは我を忘れて聞き入っていたようです。

「まあ、マリヤったら。私の声が聞こえなかったの。呼んだでしょう」

声がうわずって、音量も上がっています。あたりにはねかえる耳触りの良くない語調でした。

「……」

マリヤは困り切ってうつむいてしまいました。

「イエス様、私だけに仕事をさせてなんとも思われませんか。マリヤに言ってください、手伝

いをするように。もう、お食事の時が迫っていますもの」

マルタの荒い呼吸が部屋の空気を乱して響きます。

イエスは口を閉じると、そっと目も閉じました。沈黙が不協和な空気を包み込むように流れ出しました。イエスは沈黙に力を与えておられるようでした。沈黙は意志を持っているかのようにすみずみまで占領していきました。沈黙が部屋中に満ち満ちた時、イエスはもとのイエスに戻って穏やかな視線をマルタに向けました。

「マルタ、マルタ。いつもありがとう。あなたのおかげでわたしたちはとても快適な時を過ごしていますよ。

でもマルタ、あなたはマリヤと同じに神様から特別に選ばれているのですから、大切なことを教えましょう」

イエスは手を延ばしてマルタを招き、座るように合図しました。

「マルタ、あなたはいろいろなことに気を遣って、心配して、心を荒らしていますね。心に波が立ち、落ち着きませんね。平安や喜びがなくなっているでしょう。今のあなたは私たちにすばらしいもてなしをしようと燃えていますか。愛にあふれていますか。いちばん大切なものをどこかに置き忘れていませんか」

イエスのことばに打たれてマルタは目の奥が熱くなるのを感じました。

「マリヤをゆるしてあげなさい。あなたは何でもできる。その力がある。でもマリヤはあなたのようにできない。マリヤが今、大切にしなければならないことはわたしの話を聞くこと、心に蓄えることなのです。賢いあなたですから理解できると信じますが、人ができることはわずかなのです。どうしても必要なこともわずかです。人はそれぞれわずかにできること、どうしても必要なわずかなことを見つけなければなりません。わたしはそれを悟らせるために、またそれを与えるために働いているのです。マリヤはそれを見いだしました。マリヤにとって今、どうしても必要なこと、大切なことはわたしに聞くことです。せっかくマリヤが見つけたこの宝を取り上げてはいけません」

イエスはそう言うと、にこやかな笑みをマルタに向けました。

マルタもイエスに小さな笑みを返しマリヤにもとげの消えた視線を送り、無言で立ち去っていきました。

いら立ちが消えていました。もちろんマリヤへの怒りもです。

台所に戻ってみると、沸騰した鍋から香草の良いかおりが立ち上っています。野菜が切りそろえられています。そう、数人の女性たち、イエスとともにガリラヤから従ってきた女性の弟

子たちが楽しそうに立ち働いているのでした。

そうだった、この方々も手伝って下さっていたんだわ。一人で全部してきたわけじゃなかった。

聞いたばかりのイエスのことばが耳元に響いてきました。

どうしても必要なことはわずかです。いやひとつだけです…

あなたも良い方を選ぶのですよ、これからは。

この小さな事件はマルタの心を大きく変え、イエス理解を深めるまたとないきっかけになりました。

## ♣マリヤの涙

マリヤが家を出ると詰めかけていた村人たちも誘われるように立ち上がり、マリヤについていきました。

マリヤはきっと墓地に行くのだろう。それならいっしょに行ってラザロの死を悼もう、と思ったようです。気のいい村人たちもラザロの突然の死を我がことのように嘆き、残された若き姉妹をどう慰めてよいのかわからないまま、彼女たちの家と村はずれの墓地とを行ったり来たりしていました。

「おやっ、あれはナザレのイエスではないか」
「おお、そうだ、何で今ごろなんだ。葬儀は終ってしまったというのに」
村人たちもイエスを見知っていました。マリヤの背後から非難めいたささやきがもれてきました。
マリヤは胸が痛みました。愛してやまないイエスをそんな風に言われたくないのです。
一方マルタはマリヤを外出させてしまうと、人気の失せた家をすばやく見回しイエス一行を迎えるための手はずをあれこれと思いめぐらしました。今は特別の時なのだから村の婦人たちにすっかりお世話になってしまおうと、すぐに心を決めました。そうだわ、とにかくお願いに行かなければ。
マルタはもう外に出ていました。マリヤを追った人々を追って。
マリヤがイエスを出迎えた時、マルタはもう追いついて、幾人かの中年の婦人たちにお茶や夕食の支度を依頼していました。
そんなことが後方で進められていることなどマリヤにはわかるはずはありません。待ちに待っていたイエスを間近にした時、マリヤもまたマルタと同じように、抑えていた思いが一気に噴き出してきました。マリヤはイエスの足下に身を投げ出してひれ伏しました。

「イエス様、私の主よ。お会いしとうございました。どんなにかお待ちしていたことでしょう。もし、あなたがいてくださったら、弟は死ななかったでしょうに。死ななかったでしょうに……」

それだけ言うのが精一杯で語尾はつき上げる嗚咽に飲み込まれて音になりません。

泣きたいのです、泣かせてください。イエス様。

あなたの前で泣きたいのです、泣かせてください、イエス様。

どうかご辛抱ください。

ああ、弟は死にました。愛する弟は死にました。

あなたが愛しておられた弟は死にました。

あなたを愛していた弟は死にました。

泣かせてください、イエス様。

あなたの前で泣きたいのです。

あなたの前だから泣きたいのです。ご辛抱ください、イエス様。

マリヤはだれはばかることなく泣き続けました。身をよじって泣きました。衣のすそに顔をうずめて泣きました。声を上げて泣きました。涙のなかにマリヤ自身が溶けていくようでした。

やがて、あちらからもこちらからも引き込まれるように泣く声が聞こえ始めました。悲しみ

の波はすぐに伝わります。受け入れやすいやさしい波長ですが、人の心を揺する強さもあるのです。

## ♣泣くイエス

イエスの目にも涙が光っています。

「ラザロはどこですか」

イエスはしっかりした口調で尋ねました。マリヤは頭上から聞こえてきたイエスの声でようやく我に返りました。マルタがすぐそばに近よって来ました。

「墓地はこちらです。ご覧になってください」

イエスの近くにいた村人の一人が答え、先頭に立って歩き始めました。

イエスの目がまた新しい涙で光りました。それを見たのはマルタだけではありませんでした。村人たちも心を動かされました。

「ごらんよ、イエスが泣いている。心底からラザロを愛しておられたのだなあ」

「そうだと思う。わしらはラザロを子どもの時から知っているから、悲しむのは当たりまえさ。だが、先ごろ知り合っただけで、大の男があれだけ泣けるのは愛していた証拠だよ」

「そうだとも。イエスはどんな難病でもすぐに治したそうだよ。心の病だけじゃない、足や目や耳の不自由な人だってイエスのおかげでりっぱに治ったそうだ。それなのに、なあ、ラザロを死なせないでおけなかったものか」

「そうだ、ラザロにはもっともっと生きてもらいたかった」

墓の前には葬儀の時にも劣らぬ人の群れができていました。が、マルタは思わぬ人数に少しばかり辟易していました。マリヤにはイエスと静かに語らう時を持たせたかったからです。マリヤにはどうしてもイエスが必要だとマルタは悟っていました。自分以上にです。

突然マルタの耳にイエスの声が飛んできました。

## ♣戦うイエス

「その石を取りのけなさい」

イエスの声はしっかりと大きくいつになく命令形です。その声は居合わせた人々の耳にも確実に届きました。

墓の石を取りのける？　何のために？

だれも、イエスが何を言っているのか判断できませんでした。あまりに唐突なことです。そ

んな習慣はありません。

マルタはすっかりあわててしまいました。イエスの真意を量りかねてうろたえるばかりです。

「イエス様、いったいどういうことでしょうか。ラザロは死んでもう四日も経っているのです。四日もですよ。イエス様、ラザロは臭くなっています」

マルタはイエスと石の間に割って入りイエスに向かって言い聞かせるように説明し始めました。

四日も経っているのだから、遺体は腐敗が進み、異臭を放っているはずだ。たとえ墓から運び出してどんなに見つめようが呼んでみようが、もうラザロではない。ラザロは死んだ。死んでしまったのよ。あの時だって触ってみたわ。冷たかった。耳に口をつけて大声で呼んでみたわ。でも返事しなかった。ラザロは死んだの。死んでしまったのよ。

またイエスの声がしました。

「マルタ、もしあなたが信じるなら、神の栄光を見ると言ったばかりでしょう。聞いていなかったのですか。さあ、石を取りのけなさい、さあ」

栄光を見る？　なんのことでしょう。よみがえりのことかしら。それなら信じているって申し上げたはずだわ。

しかしイエスのことばには逆らいがたい厳かな力がありました。権威と言ったらいいのでしょ

うか。

言われたとおりにするのが当然。せずにはいられない。

だれもがそう思ったのです。数人の男たちが駆け寄り、まるで以前から打ち合わせでもしていたように、手際よく石を抱え、かたわらに移動させました。

小さな空間。

一同の目がいっせいにそこに吸い寄せられました。一同は申し合わせたようにきっちりと口を閉じ、息づかいさえ聞こえません。

イエスはきっと中に入って行くだろう。

だれもがそう思いました。マルタもです。

この入口って、なんだか新しい世界に続いているようだわ。

イエス様がお入りになるなら私も入ろう。ラザロがどんな姿になっていてもいい、イエス様が行かれるなら私もついて行こう。

マルタは心を決めると、いつでも一歩を踏み出せるように身を構えました。

その時でした。イエスの声を聞いたのは。

## ♣神の栄光

「ラザロよ、出てきなさい」

何という大声でしょう。このイエスからいまだかつてだれもこんな大きな声を聞いたことがありませんでした。一瞬、地が震えました。木々も枝々を揺するほどでした。生い茂る草々も大風に吹かれたようになびきました。マルタは腰が砕けるような衝撃を感じました。耳が鳴って気が遠くなっていくのです。群れの中にはあおむけにのけぞって倒れる者もいました。声に驚いたのではありません。声といっしょにイエスから膨大なエネルギーが噴出したかのようでした。

と、小さな空間、墓の入口付近に物音がするではありませんか。

「えっ、ラザロ!?」

マルタが叫んだのが最初だったでしょうか。

「ラザロだ！」

「ラザロだ！、ラザロだ！」

「おお、ラザロだ、生きているぞ！」

まさしく、マルタ、マリヤの弟ラザロが立っていました。葬られた時と同じに、全身を亜麻布で包まれたまま。

村人が先を争ってほどき始めました。マルタはマリヤをしっかりと抱きかかえました。いえ、お互いの体にしがみついて支え合ったのです。互いの体が音を立てて震えています。

マルタはじきに視線を変えてイエスを見つめました。が、すぐにイエスの姿は両眼からぼうぼうと流れる涙に飲み込まれてしまいました。マルタは感動の潮に身を任せながらも、意識を働かせて事実を見据えようとけんめいです。

「マリヤ、これが神の栄光なのね。私たちはだれも見たことのない貴い栄光を見ているのだわ。なんと言う特権でしょう。なんと恐れ多いことでしょう。ねえ、マリヤ、あなたにはもうとっくにわかっているわね。このお方こそ、神の御子キリストよ。そう信じるでしょう、マリヤ」

マルタはなおも考え続けます。

神の栄光って、天のかなたにあるものじゃないのね。見せていただけるものなのね。この目で見えるものなのね。具体的で、現実的で、とても身近なものなのね。明日のことじゃない。遠い先のことじゃない。悲しみの真ん中で、苦しみのどん底で、絶望の闇の中で手の上に乗せていただけるものなのね。

マルタは先を急ぎます。思いを走らせます。マルタはいつでもそうなのです。自分で確認し、判断し、答を見つけたいのです。マルタはいつも積極的です。勤勉です。

思いはさらに加速をつけて前進します。

あっ、

マルタは小さく叫びました。

もしかして、神の栄光ってイエス様ご自身のことかもしれない！　それからマリヤに耳打ちしました。

「神の栄光って、イエス様のことよね。これですべてがわかったわ。イエス様にお会いしているそのことが神の栄光を見ていることなのよ。私たちは何という恵みの中にいるのでしょう」

マルタの息は弾んでいました。

その時マリヤは静かに、しかし確信に満ちて添えるように言いました。

「もっと大きい神様の栄光を私たちはじきに見ることになるのだわ。イエス様を通して」

「えっ、それってなあに、マリヤ、あなたは何を知っているの」

マルタは聞き返しましたが、マリヤはもう口を開こうとはしませんでした。マルタもそれ以上は追いかけません。

マルタは早くも意識を変え、別の思考を開始していました。
すぐにラザロを連れ帰らねばならない。体を洗い、新しい衣服に着替えさせ、食事をさせなければと。
そうだわ、今夜は全快の祝会をしましょう。村中の人たちを招待して。イエス様もおられることだし、すばらしいチャンス。でも全快っておかしいかしら。いいえ、死からも癒されたのだからほんとうの全快祝いだわ。
そうそう、今日こそはマリヤにもしっかり手伝ってもらいましょう。きっと、マリヤはそうするわ。喜んで。
いいえ、とんでもない。マリヤをイエス様のそばから離してはいけない。どうしても必要なたったひとつのことを十分にさせてあげなくては。私もそうするつもり。